

平成 25 年度シャコ伊勢・三河湾系群の資源評価

責任担当水研：増養殖研究所（黒木洋明、渡辺一俊）

参 画 機 関：愛知県水産試験場、三重県水産研究所

要 約

シャコ伊勢・三河湾系群は、平成 14 年に資源回復計画の対象種に指定され、資源評価調査対象系群に指定された。資源回復計画は平成 23 年度で終了したが、同計画で実施されていた措置は、平成 24 年度以降、新たな枠組みである資源管理指針・計画の下、継続して実施されている。愛知県における 1970 年以降の漁獲量は 425～2,238 トンの範囲で変動し、3～5 年周期で増減を繰り返している。1990 年までは増減を繰り返しながらも増加傾向にあったが、1991 年から 4 年連続して直線的に減少し、1994 年に 850 トンとなった。1996 年から 3 年間は 1,000 トンを超える漁獲量があったが、1999 年以降は再び 1,000 トンを割り込んだ状態が続いており、2005 年以降の漁獲量は 500 トン台以下の過去最低の水準となった。資源量指標値は 1990 年から 1999 年にかけて減少傾向が続き、2000 年代に入ってから低位水準で推移していたが、2010 年には増加傾向が認められ、現在の水準は中位、動向は横ばいと判断された。三重県では愛知県に比較して漁獲量は少なく、21 年間の漁獲資料ではほぼ 10～60 トンの範囲にある。三重県の漁獲量も近年減少しており、1996 年以降は 8～36 トンの低い水準で推移している。

水準：中位 動向：横ばい

本件資源評価に使用したデータセットは以下のとおり

データセット	基礎情報・関係調査など
漁獲動向	・年別県計漁獲量（1970～2003 年：愛知県・三重県、2004～2006 年：東海農政局、2007～2011 年：漁業・養殖業生産統計年報 資源回復計画対象魚種漁獲量） ・主要港水揚げ量（愛知県、三重県） ・月別体長組成調査（愛知県、三重県） ・標本船（愛知県、三重県） ・漁場一斉調査（愛知県）
漁獲努力量	・主要港小型底びき網漁船出漁状況（愛知県、三重県） ・標本船（愛知県、三重県）
資源量指標値	・小型底びき網 CPUE（愛知県）
新規加入量	・シャコ浮遊幼生分布調査（愛知県、三重県）

1. まえがき

シャコは江戸前の寿司や天ぷらの材料として利用され、東京湾では古くから漁獲されている。その他の海域でも、伊勢・三河湾をはじめ、石狩湾、仙台湾、大阪湾、瀬戸内海各地、博多湾などで漁獲対象資源として、小型底びき網や刺網によって漁獲される。近年、シャコを漁獲している小型底びき網漁業において、漁獲物に占めるシャコの比率が低下していることが指摘され、魚体の小型化も懸念されている。

本系群は、平成 14 年度に資源回復計画の対象魚種に指定され、底びき網漁業の休漁期の設定、小型魚混獲回避のための底びき網の目合い拡大等の漁具改良、再放流に伴う生残率の向上を図るためのシャワー設備の導入などの措置が実施された。資源回復計画は平成 23 年度で終了したが、同計画で実施されていた措置は、平成 24 年度以降、一部見直しを行い、新たな枠組みである資源管理指針・計画の下、継続して実施されている。

2. 生態

(1) 分布・回遊

シャコは我が国各地の沿岸域、黄海、東シナ海に分布し、内湾の水深 10～30m の泥底の海域に多くみられる。シャコ伊勢・三河湾系群（図 1）の主漁場は伊勢湾口から知多半島西岸に形成され、三河湾では知多半島東部の知多湾に形成されている。分布域は漁場より広く、当該海域の泥底にはほぼ全域に生息しているようである（愛知県 1988）。愛知県の小型底びき網漁船の標本船の単位漁獲努力量あたりの漁獲量（CPUE: kg/1 時間曳網）の月別変化を図 2, 3 に示した。伊勢湾では主に知多半島西岸の湾奥部から湾口部にかけて分布の中心があり、三重県側では湾南部に多い傾向がある。分布中心は時期により変動し、特に 7～8 月には、湾奥と知多半島南部の湾口部に多く分布する。このような傾向は、夏期に発達する底層の貧酸素水塊を避けた分布となっている（愛知県水産試験場発行・伊勢・三河湾貧酸素情報、三重県水産研究所・浅海定線観測結果）。大阪湾では、夏期に貧酸素水塊を避けてシャコの一部は移動するものの、留まった多くの個体は死亡するものと考えられている（有山ほか 1997）。

伊勢湾のシャコの浮遊期幼生の 2012 年の月別分布調査結果（図 4）を見ると、幼生は 7 月から 11 月に出現し、湾南部から湾口部にかけての海域で分布量が多かった。2004～2006 年および 2008～2011 年の調査での出現ピークは 8～10 月で、基本的に出現ピークは年 1 回であるが、2007 年には 6 月と 9 月、2012 年には 7～8 月と 10 月の 2 回のピークが認められた（図 5）。幼生の採集数は、近年、増加傾向にあり、2009 年以降は高いレベルにある（図 5）。

東京湾におけるシャコ幼生の鉛直的な分布中心は、6 月から 7 月にかけては密度躍層下の深い層にあるが、8 月以降は貧酸素水塊を避けて密度躍層上の浅い層に移る（中田 1986）。成層構造が発達する夏季には、エスチュアリー循環流により表層では湾外方向の流れが卓越するようになるため、幼生が湾外へ輸送される危険性が高まり、湾内へ着底する個体数が減る可能性が指摘されている（児玉ら 2003）。東京湾のシャコ幼生出現のピークについて、清水(2000)は 6～7 月と 8～9 月の 2 回あるとしている。一方、Kodama et al.(2004)はシャコ資源の低水準期である近年の出現パターンは高水準期と異なり、出現ピークが 1 回となったことを指摘している。その原因として、貧酸素水塊等の環境要因が幼生と稚シャコ

の生残に影響した結果ではないかと推測している（児玉 2004、Kodama et al. 2009）。2007 年および 2012 年の幼生出現に 2 回のピークが見られたことは、資源状態の好転を示唆する可能性が考えられる。

（2）年齢・成長

シャコはふ化後 1 ヶ月以上の間に 11 の異なる幼生ステージを経て着底し、約 2 年後に 10cm 以上となって漁獲対象となる。図 6 に小型底びき網の漁場一斉調査により採捕されたシャコの体長組成を示した（2012 年度愛知県調査データより）。5 月には、体長モードが 6cm の小型群と 11cm の大型群の 2 群が認められ、大型群は 2 歳+の春季に産卵に加わる親シャコと考えられる。小型群は前年発生群であり、5 月から 11 月にかけて、体長モードが 6cm から 10cm へと徐々に大きくなり、11 月以降は、同年に発生した新たな小型群の加入がみられるようになる。生後 3 年以上を経たと思われる 13～15cm 以上の個体は周年にわたりほとんど見られない。成長は、東京湾での体長組成解析から推定された例を参考にすると、1 歳で体長約 8cm、体重約 8g、2 歳で体長約 12cm、体重約 26g となっており、4 歳まで生きるとすれば体長約 15cm、体重約 56g になると考えられている（図 7）。なお、東京湾のシャコについては、リポフスチン（脳内神経細胞の中に蓄積される色素）を年齢形質として成長が再検討された結果、漁獲サイズに達した個体には様々な年齢群が含まれていて 3 歳以上の個体の割合が高いことが示され、従来の体長組成解析から推定された加入年齢よりも高齢の個体が漁獲対象の中心となっている可能性が指摘されている（Kodama et al. 2005）。伊勢・三河湾においても今後成長に関する検討が必要である。

（3）成熟・産卵生態

伊勢湾における成熟体長は約 8cm と報告されている（愛知県 1992）。過去の資料によると、産卵期は 5 月から 9 月まで続くと考えられており、生殖腺の発達過程から 5 月と 8 月の年 2 回の産卵ピークが存在する可能性が指摘されている（愛知県 1990）。生殖腺熟度指数（生殖腺重量÷体重×100）調査（愛知県調査）を見ると（図 8）、熟度指数が 6.0 を超える雌個体の比率（頻度%）は、通常、3～4 月から増加しはじめ、5 月と 8 月に 2 回のピークがあり、過去の報告と一致していた。2005 年では、3 月から増加しはじめ、4 月と 5 月にピークが 1 回しか認められず、2011 年も明瞭な夏季のピークは認められなかった。したがって、本系群は基本的には 1 年に 2 回の産卵期を持つものの、年変動があり年 1 回の場合もあると推定される。また、成熟個体の割合は、最近では低下傾向が認められていたが、2010 年春季以降は増加している（図 8）。

（4）被捕食関係

東京湾では 2～3cm の小型個体では魚類を摂餌する比率が高く、4～12cm で貝類の比率が高まり、12cm 以上の大型個体では多毛類、甲殻類も摂餌して食性が広くなることが報告されている（中田 1989）。また、博多湾ではマダイ、マハゼ、トカゲゴチ、ミミイカ等がシャコを捕食しているが、これらの捕食者が食べていたシャコはかなり小型の個体であった（浜野 2005）。また、伊勢・三河湾では、マアナゴが小型のシャコを捕食していることが確認されている（日比野 2011）。

3. 漁業の状況

(1) 漁業の概要

伊勢・三河湾におけるシャコの漁獲は他海域と同様に小型底びき網によるものがほとんどであり、他には刺し網と定置網で若干漁獲されている程度である。伊勢・三河湾の小型底びき網漁業にとってシャコは最も重要な魚種で、かつては同漁業種類の水揚げ金額の20～50%を占めていた(愛知県 1991)。最近ではその割合を減らしているものの(水野 2003)、最近5ヶ年では2008年を除き水揚げ金額において首位となっており、依然としてシャコの重要度は高い。

(2) 漁獲量の推移

愛知県における1970年以降の漁獲量は425～2,238トンの範囲で変動し、3～5年周期で増減している(表1、図9)。1990年までは増減を繰り返しながらも増加傾向にあったが、1991年から4年連続して直線的に減少し、1994年に850トンとなった。近年では、1996年から3年間1,000トンを超える漁獲量がみられたが、1999年以降は再び1,000トンを割り込み、その後減少傾向が続いている。特に2005年以降の漁獲量は400～600トン台という過去最低の水準に落ち込み、さらに2011年は425トンと過去最低となった。三重県では愛知県に比較して漁獲量は少なく21年間の漁獲資料(表1、図9)では概ね10～60トンの範囲にあり、1996年以降は8～36トンの低い水準で推移している。なお、2011年までは、海面漁業生産統計調査として「資源回復計画対象魚種の漁獲動向」が半期ごとに県合計値として農林水産省HP等で公表されていたが、資源回復計画が終了した2012年以降は公表されていない。2012年分以降の県合計漁獲量データの入手については、今後検討が必要である。

愛知県における主要水揚げ港(豊浜)での漁獲量の経年変化(図10上段、1990～2012年)を見ると、2012年漁獲量は160トンで、2011年の165トンと同水準であった。経月変化をみると(図10下段)、4～5月にピークがあり、8月以降の漁獲量は少ないが、10月から再び増加し、12月にかけてある程度まとまった漁獲がみられた。ただし、2009年は4～5月の漁獲が極端に少ない一方7～8月に漁獲が多く、例年と異なる傾向があった。また、2012年は4～5月の主漁期から夏季にかけては順調な漁獲があったが、10～12月の漁獲量は極端に低下しており、今後の動向を注視する必要がある。

(3) 漁獲努力量

愛知県および三重県の主要水揚げ港を根拠地とする小型機船底びき網漁船の延べ出漁隻数(隻・日)を漁獲努力量として、その経年変化をそれぞれ図11、図12に示した。過去10数年で延べ出漁隻数は大きく減少しており、漁獲努力量は相当減少しているものと推測される。平成14年度より、漁場位置、努力量、漁獲尾数に関する基礎的な情報を収集するため、小型底びき網を抽出して標本船調査を実施しており、CPUE(単位努力量あたり漁獲量)の漁場分布(図2, 3)等の情報が蓄積しつつある。これらのデータは漁獲努力量およびCPUEの推移を詳細に検討に利用でき(補足資料参照)、今後も調査を継続してデータを蓄積していく必要がある。

4. 資源の状態

(1) 資源評価方法

2008 年まで伊勢・三河湾におけるシャコ漁獲の大部分を占める愛知県の漁獲量の推移を主たる判断材料としていたが、漁獲努力量の著しい減少が継続していることから(図 11)、過去 20 年間のデータが整った 2009 年以降は同県の小型底びき網によるシャコの CPUE(単位漁獲努力量あたりの漁獲量[kg/隻])の経年変化を主体として判断している。その他、漁法別月別漁獲量の推移、各県の生物情報収集調査、標本船調査、漁場一斉調査ならびに新規加入量調査の結果も現在の資源状態の判断材料とした。

(2) 資源量指標値の推移

愛知県の主要水揚げ港を根拠地とする小型機船底びき網漁船(伊勢湾で主に操業)によるシャコ CPUE [kg/隻]を資源量指標値とし、その推移(1989 年～2012 年)を図 13 に示した。1990 年から 1999 年にかけて減少傾向が続き、2000 年代に入ってから低い水準で推移していたが、2006 年以降は増加傾向が認められる。

(3) 資源の水準・動向

伊勢・三河湾全体での漁獲量は過去最低の水準にある。資源量指標値は、高水準期の終期と思われる 1990 年から 1999 年にかけて減少傾向が続き、2000 年代に入ってから低い水準で推移していたが、最近では増加傾向が認められる。過去 24 年間の資源量指標値の最大値と最小値間を三等分して水準を判断すると(図 13)、2012 年は中位水準にある。動向は過去 5 ヶ年の推移から横ばいと判断した。

5. 資源管理の方策

伊勢・三河湾における現在のシャコの漁獲量は 1970 年以降で最低の水準にある。この傾向は東京湾において 1990 年代になってから資源構造が変化して不漁期が継続していること(清水 2002)とよく似ている。東京湾のシャコの年級強度は生活史初期における環境要因により主に決定されると考えられており(児玉 2004)、本系群のシャコも環境要因、特に貧酸素水塊の規模拡大の影響を受けた結果、資源の低水準が続いていた可能性がある。しかし今のところ資源の減少要因の特定は困難で、また環境の人為的管理は現状では難しいことから、限られた資源を持続的かつ有効に利用する方策が必要である。

シャコ伊勢・三河湾系群は、水産庁の進める資源回復計画の対象種に指定されており、同計画では、平成 23 年度までの取り組みにより、取り組み終了後のとらふぐ、まあなご、しゃこの漁獲量を 25%程度増加させることが目標とされた。この目標を達成するために、底びき網漁業の休漁期を設定するとともに、漁場等の操業実態を勘案しつつ小型個体保護の観点から小型底びき網の適切な網目に関する検討を行い、シャワー設備等の導入により小型個体の再放流を推進することが具体的措置としてあげられた。

伊勢・三河湾の小型底びき網はシャコ以外にも小型エビ類、カレイ類及びマアナゴ等の複数の魚種を対象としていることから、目合いを決定する際には周年一律に規制するのではなく、漁獲物の種組成の季節変化を考慮しての柔軟な対応が必要となる(愛知県、1988、

1989、1990、1991、1992)。小型個体の放流は、漁獲サイズの大型化を目指した加入量当たりの漁獲量(YPR)の最大化を実現するだけでなく、未成熟個体を放流することによって産卵親魚量を確保する意味でも重要である。

一方、資源量の増大を図る上で産卵親魚量の確保は極めて重要であるが、産卵親魚の確保を目的としたシャコの冬季漁獲制限が、平成 21 年度から愛知県まめ板網漁業者組合により実施されている。これは 1990 年代以降、漁獲量が大きく減少してきているなかで、産卵前に相当する冬季（1～2 月）の漁獲量は増加していることから、産卵前の親魚を保護することにより産卵水準の引き上げを図ろうとするものである。冬季のシャコの価格は低いことから漁家経営に与える影響は最小限と考えられ、取り組みやすく効果の期待できる方策であり、継続することが望まれる。

2010 年度以降の資源評価の結果、シャコ伊勢・三河湾系群の資源は継続していた低位水準を脱して中位水準となり、資源回復の方向に向かっている可能性が示唆された。資源回復計画による取り組みや冬季水揚げ制限の効果が現れはじめた可能性も十分に考えられる。この状態を継続し、資源回復を実現するためには、これまでの取り組みの継続がより一層重要となる。

一方、伊勢・三河湾の貧酸素水塊の規模は拡大の傾向にあり、貧酸素水塊の拡大時にはシャコの分布域が縮小する結果として水塊周辺部漁場での漁獲圧が高まり、特に商品サイズに満たない小型のシャコ（1 歳）が多獲される（補足資料）。したがって貧酸素水塊発生時の漁場利用については十分な注意が必要であり、今後、夏季における小型シャコの混獲実態をふまえた合理的な漁場利用ルールについても検討していく必要がある（補足資料参照）。

6. 引用文献

- 愛知県(1988) シャコの資源評価手法の開発．昭和 63 年度愛知県水産試験場業務報告，147-151.
- 愛知県(1989) シャコの資源評価手法の開発．平成元年度愛知県水産試験場業務報告，156-161.
- 愛知県(1990) シャコの資源評価手法の開発．平成 2 年度愛知県水産試験場業務報告，140-144.
- 愛知県(1991) シャコの資源評価手法の開発．平成 3 年度愛知県水産試験場業務報告，119-120.
- 愛知県(1992) シャコの資源評価手法の開発．平成 4 年度愛知県水産試験場業務報告，121-122.
- 有山啓之・矢持進・佐野雅基(1997) 大阪湾奥部における大型底生動物の動態について．Ⅱ．主要種の個体数分布・体長組成の季節変化，沿岸海洋研究，35(1); 83-91.
- 浜野龍夫(2005) シャコの生物学と資源管理．日本水産資源保護協会．東京．208 pp.
- 日比野 学(2011) 伊勢・三河湾におけるマアナゴの食性．第 15 回アナゴ漁業資源研究会資料
- 石井 洋・池田文雄(1999) シャコ選別器の開発 Ⅱ 投棄シャコの生残率推定．神水試研

報, 4, 5-7.

児玉圭太(2004) 東京湾におけるシャコの資源量変動機構に関する研究. 東京大学大学院博士論文.

Kodama K, Oyama M, Lee JH, Akaba Y, Tajima Y, Shimizu T, Shiraishi H, Horiguchi T (2009) Interannual variation in quantitative relationships among egg production and densities of larvae and juveniles of Japanese mantis shrimp *Oratosquilla oratoria* in Tokyo Bay, Japan. *Fisheries Science*, 75; 875-886.

児玉圭太・清水詢道・青木一郎(2003) 東京湾におけるシャコ加入量の変動要因. 神水研研報, 8; 71-76.

Kodama K, Shimizu T, Yamakawa T, Aoki I (2004) Reproductive biology of the female Japanese mantis shrimp *Oratosquilla oratoria*(Stomatopoda) in relation to changes in the seasonal pattern of larval occurrence in Tokyo Bay, Japan. *Fisheries Science*, 70; 734-745.

Kodama K, Yamakawa T, Shimizu T, Aoki I (2005) Age estimation of the wild population of Japanese mantis shrimp *Oratosquilla oratoria*(Crustacea: Stomatopoda) in Tokyo Bay, Japan, using lipofuscin as an age marker. *Fisheries Science*, 71; 141-150.

水野正之(2003) 愛知県におけるアナゴ漁業について. 第6回アナゴ漁業資源研究会資料.

中田尚宏(1986) 東京湾におけるシャコ幼生の分布について. 神水試研報, 7, 17-22.

中田尚宏(1989) 東京湾におけるシャコの生物学的特性. 神水試研報, 10, 63-69.

清水詢道(2000) 東京湾におけるシャコ浮遊幼生の生残率の推定. 神水研研報, 5; 55-60.

清水詢道(2002) 東京湾のシャコ資源について I 東京湾のシャコ資源について. 神水研研報, 7; 1-10.

清水詢道(2004) 東京湾のシャコ資源について II シャコ資源回復への私案. 神水研研報, 9; 1-11.



図1. シャコ伊勢・三河湾系群の分布域

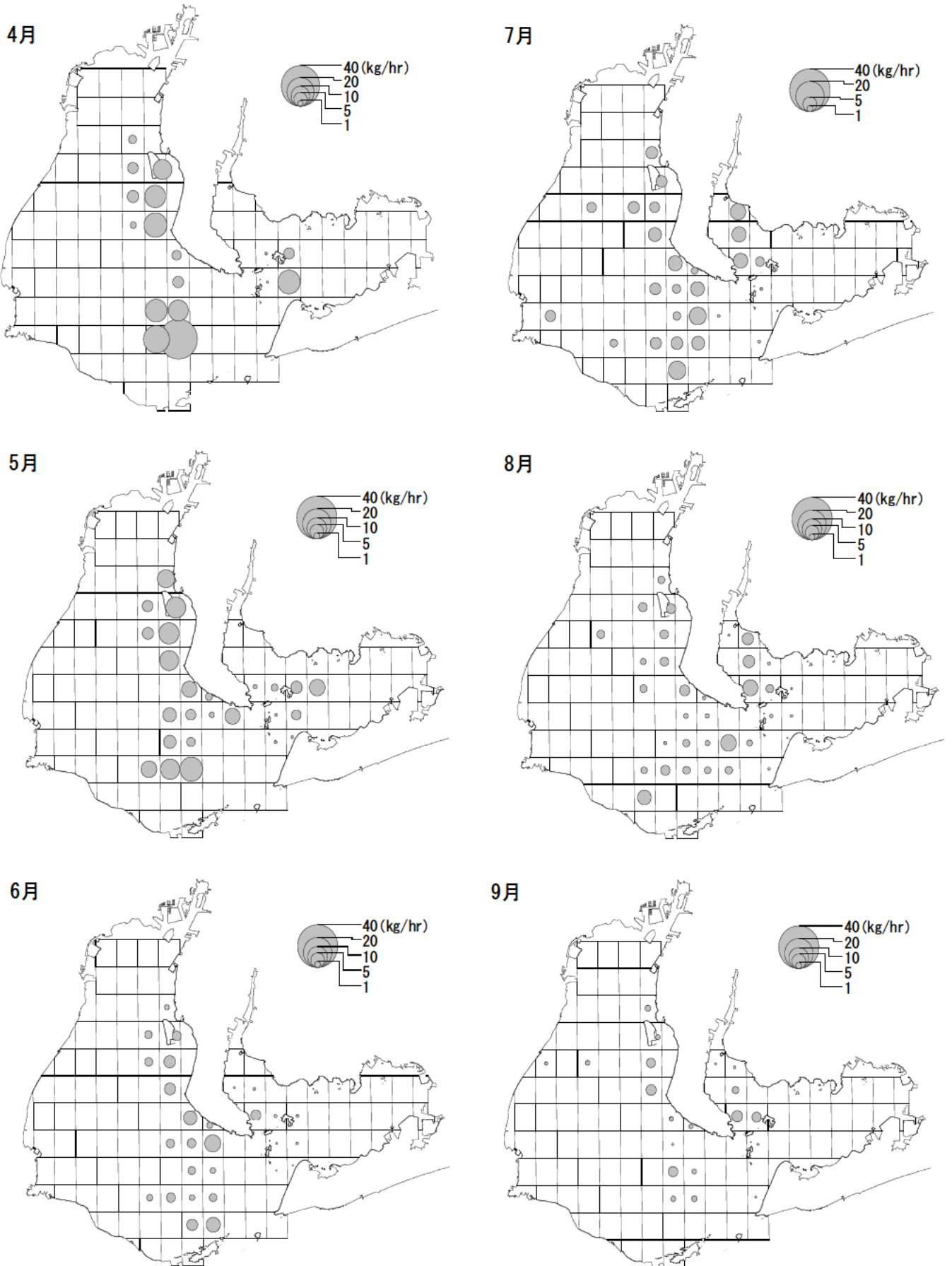
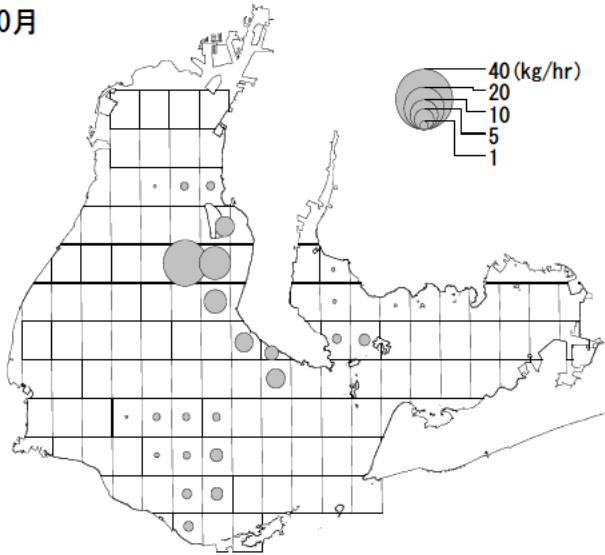
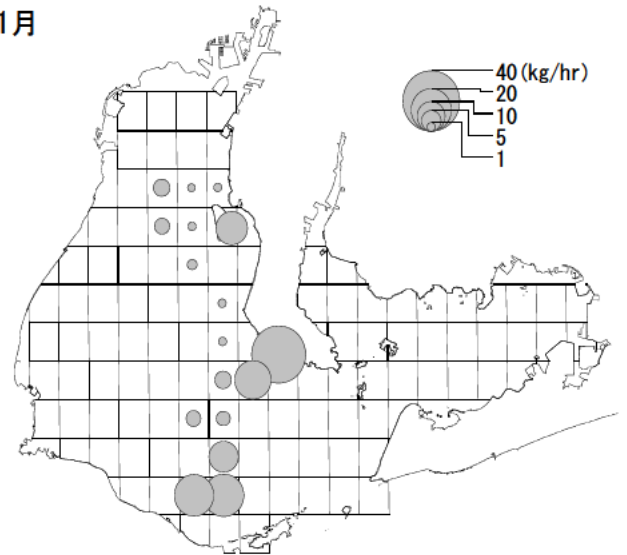


図2. 小型底びき標本船のシャコの単位漁獲努力量あたりの漁獲量(CPUE: kg/hour) (2011年4月～2011年9月)

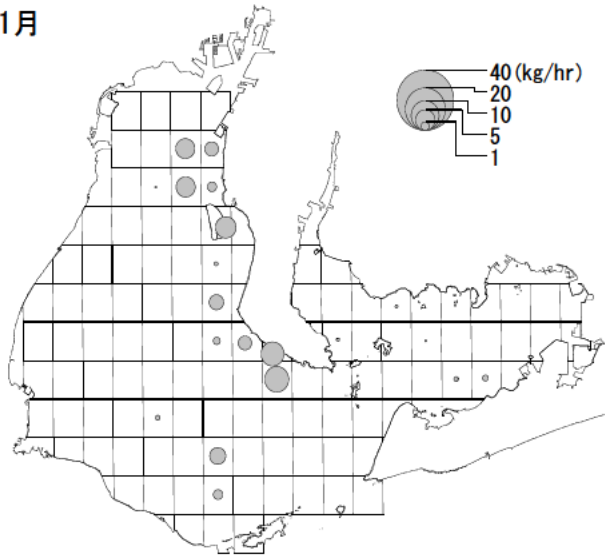
10月



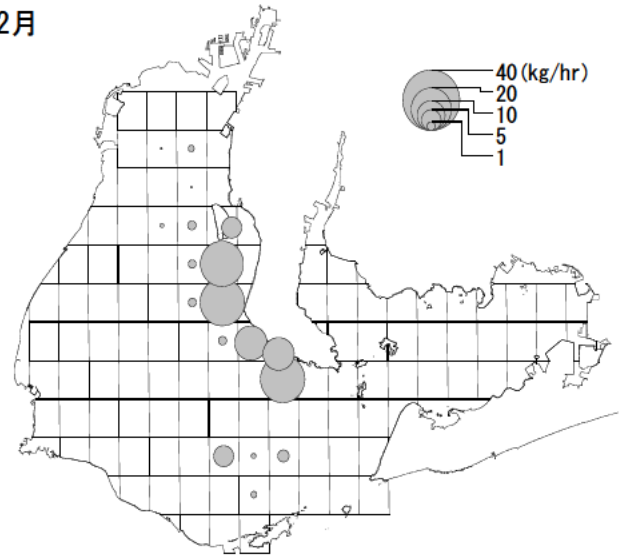
1月



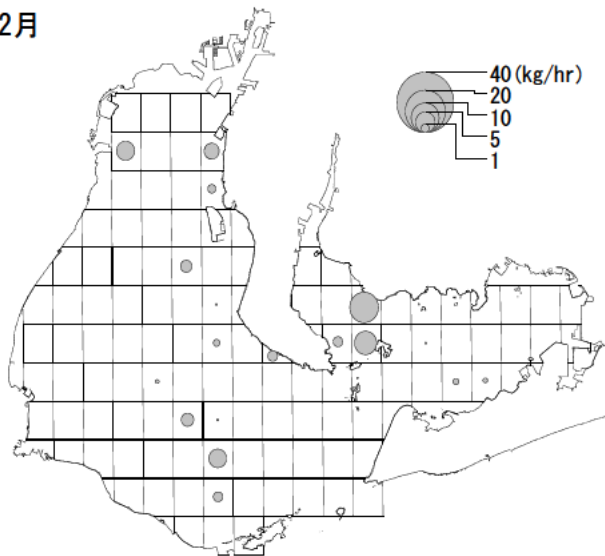
11月



2月



12月



3月

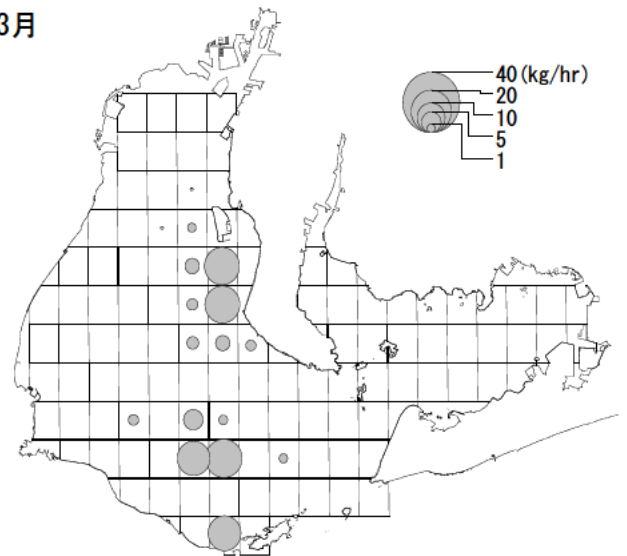


図3. 小型底びき標本船のシャコの単位漁獲努力量あたりの漁獲量(CPUE: kg/hour) (2011年10月～2012年3月)

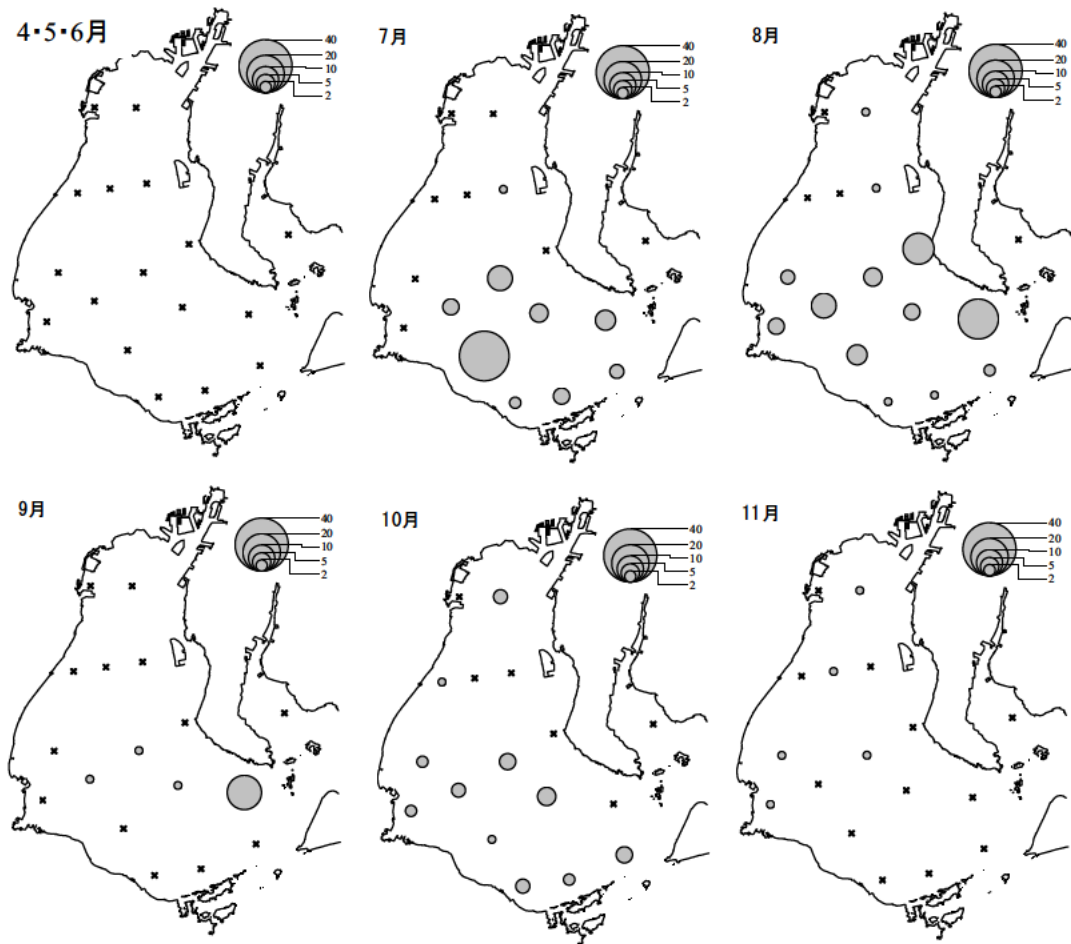


図4. 伊勢湾におけるシャコ浮遊期幼生の分布
(2012年4月～11月、三重県調査)

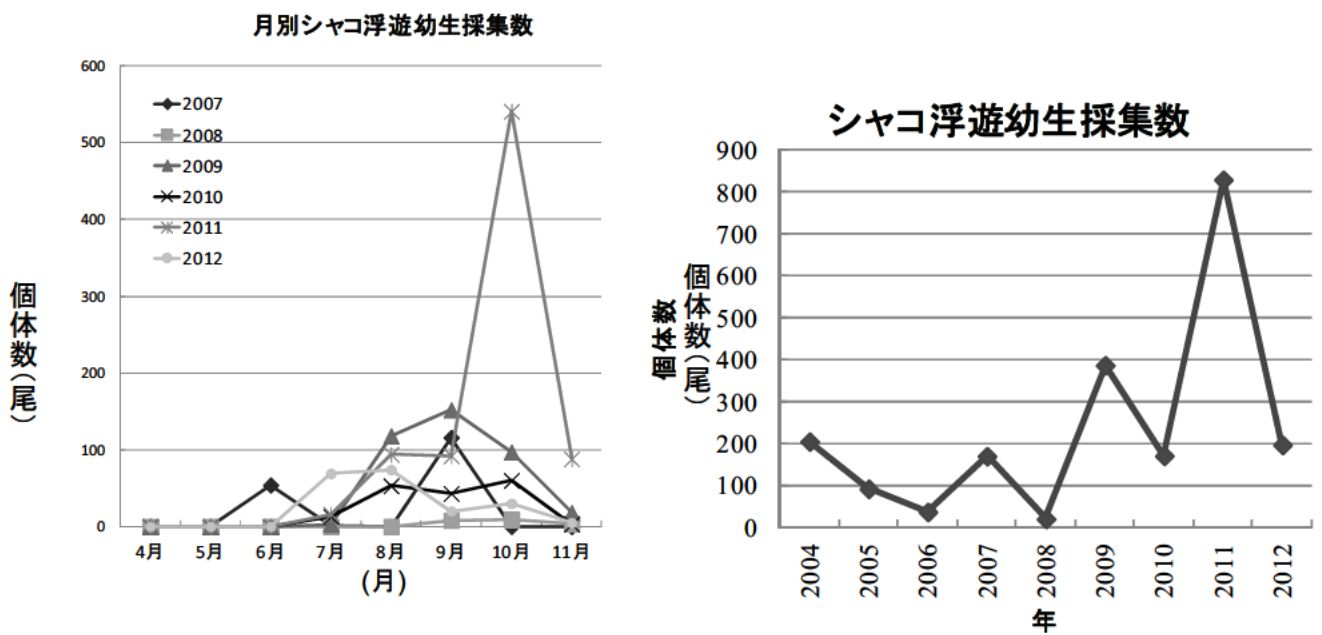


図5. 伊勢湾におけるシャコ浮遊幼生採集数 (左：月別、右：経年変化)
(2004～2012年ノルパックネット鉛直曳き 三重県調査)

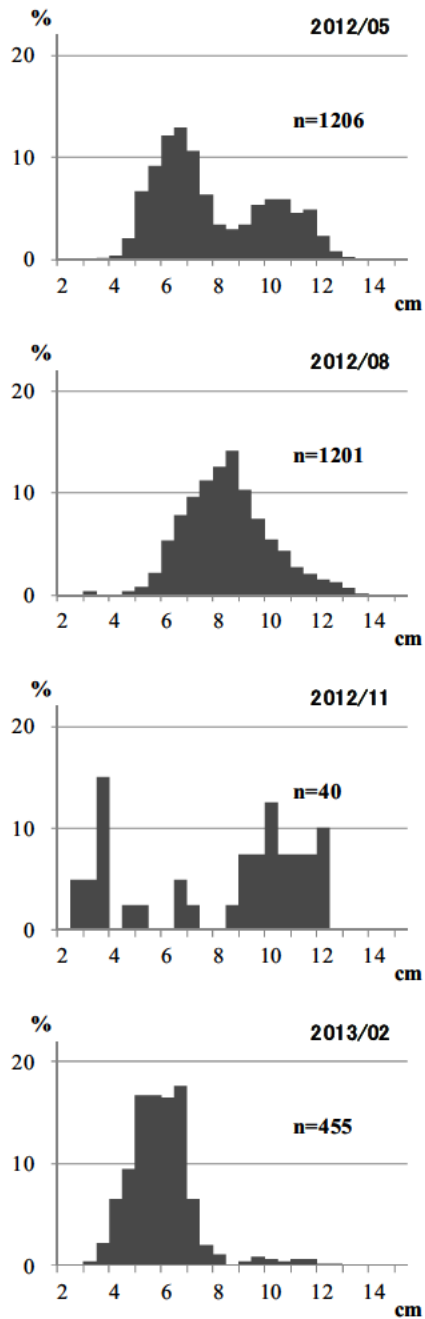


図6. 伊勢・三河湾で漁獲されたシャコの月別体長組成（愛知県調査）
漁場一斉調査（2012年度）による。

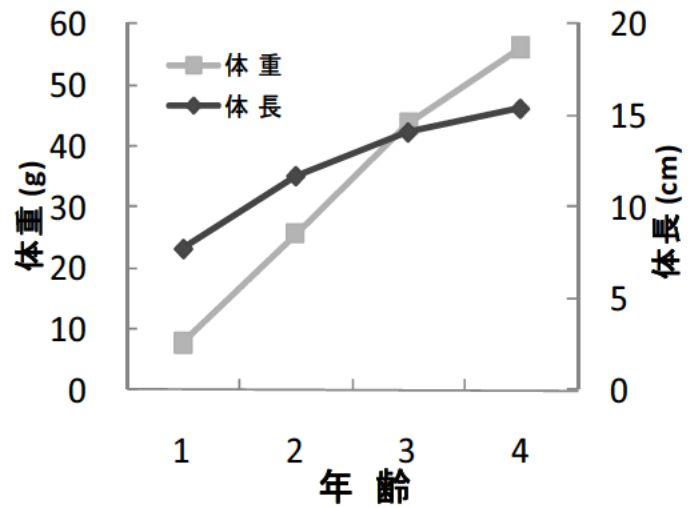


図7. シャコの年齢と成長（東京湾）

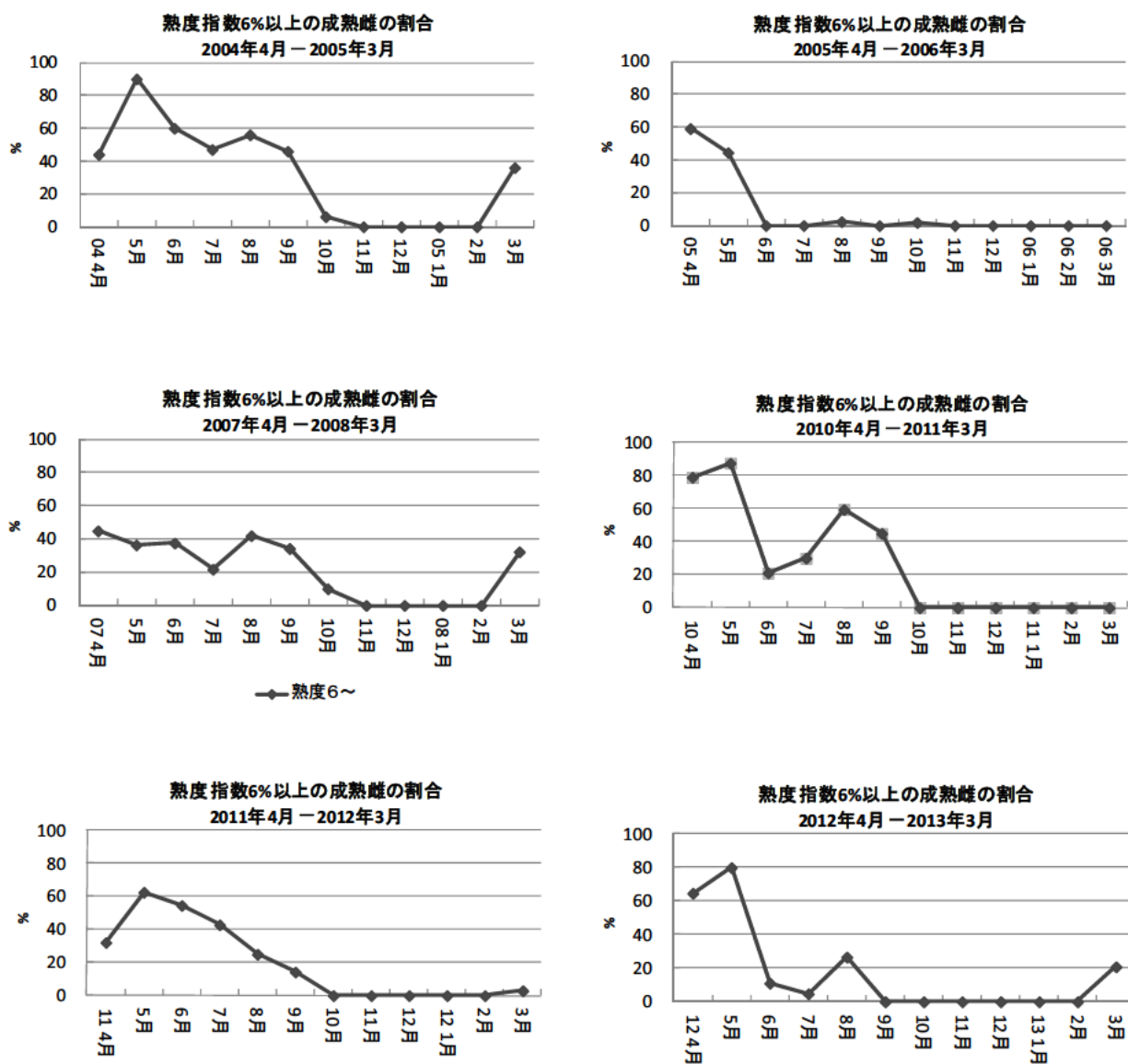


図8. 伊勢・三河湾のシャコ成熟雌比率の月別変化
(2004, 2005, 2007, 2010～2012年度)

表1. 愛知県と三重県シャコ漁獲量
(1970-2011年)

年	愛知県	三重県
1970	839	
1971	876	
1972	844	
1973	1,445	
1974	1,263	
1975	841	
1976	1,414	
1977	2,238	
1978	1,395	
1979	1,279	
1980	1,203	
1981	1,390	
1982	1,083	
1983	1,814	
1984	1,450	
1985	1,283	
1986	1,414	
1987	1,548	
1988	1,431	
1989	1,611	
1990	1,777	
1991	1,571	61
1992	1,303	58
1993	995	42
1994	850	50
1995	905	33
1996	1,113	24
1997	1,079	12
1998	1,242	21
1999	922	11
2000	832	19
2001	896	9
2002	816	17
2003	709	27
2004	732	24
2005	580	32
2006	512	36
2007	657	28
2008	538	10
2009	485	8
2010	522	22
2011	425	18
2012	-	-

データ出典)

1970-2003 愛知県:愛知県調べ 三重県:三重県調べ

2004-2006 東海農政局

2007-2011 漁業・養殖業生産統計年報 資源回復計画対象魚種の漁獲動向(農林水産省)

2012 利用可能な統計情報なし

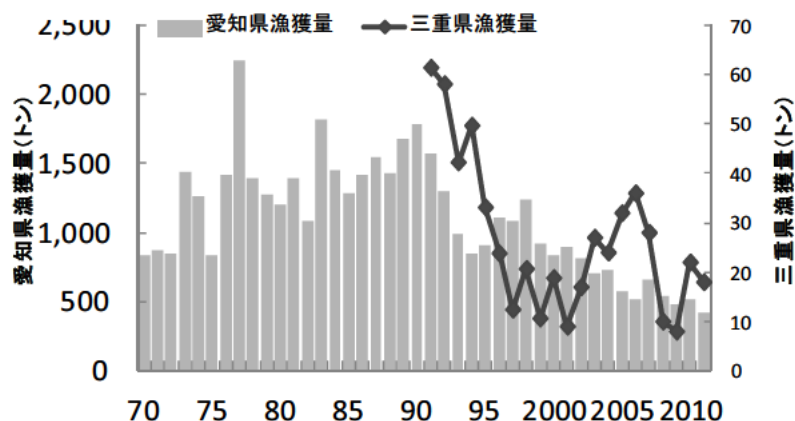


図9. 愛知県と三重県における漁獲量の
の経年変化 (1970～2011年)

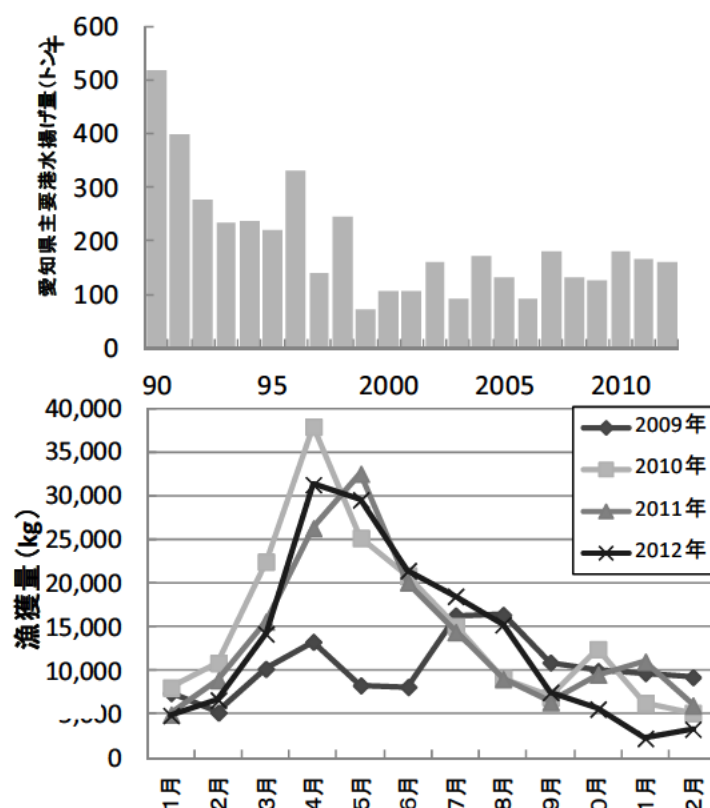


図10. 愛知県の主要水揚げ港（豊浜）における
漁獲量の経年変化（上段、1990～2012年）
月別漁獲量（下段、2009～2012年）

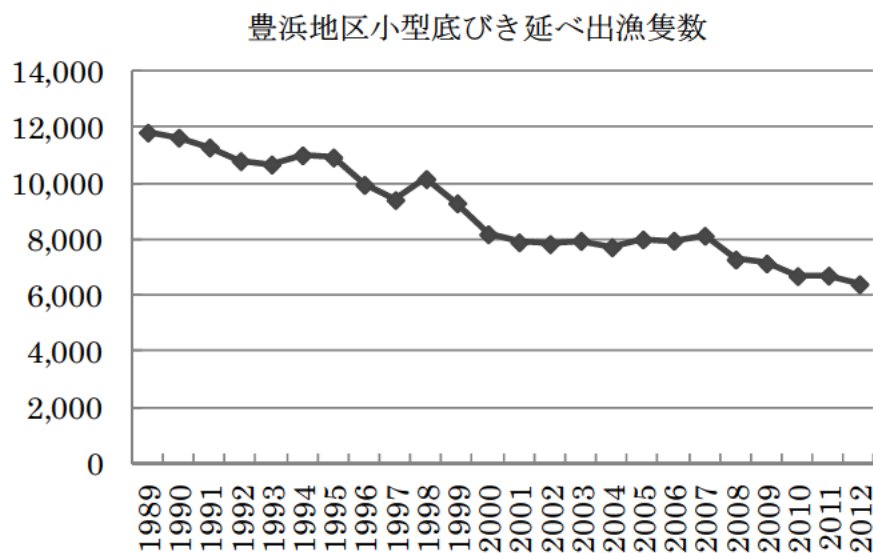


図11. 豊浜地区小型底びき延べ出漁隻数の推移

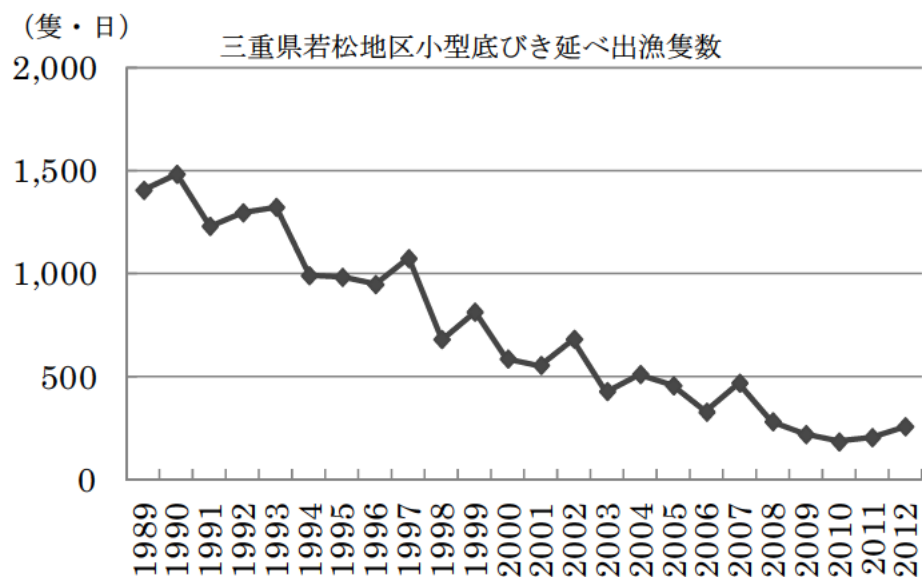


図12. 三重県若松地区小型底びき延べ出漁隻数の推移

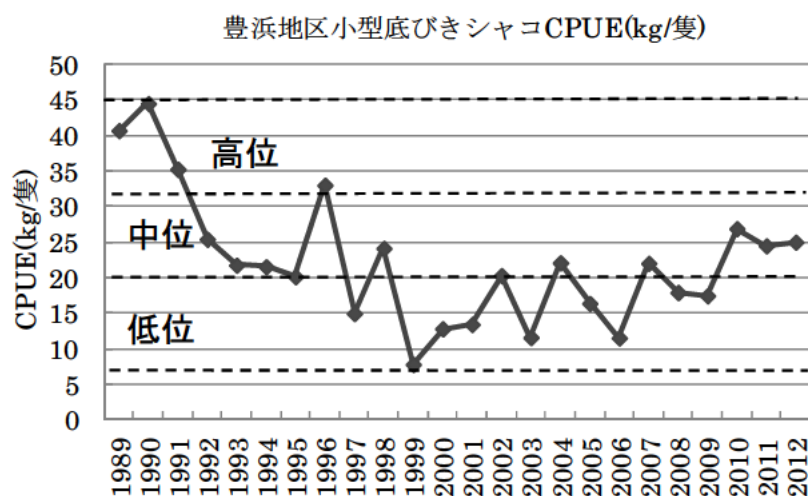


図13. 豊浜地区小型底びきシャコCPUEの推移
水準・動向を判断する資源量指標値（最大値と最小値間を三等分し高位・中位・低位を区別）

補足資料：夏季の小型シャコの混獲実態と資源管理の必要性について

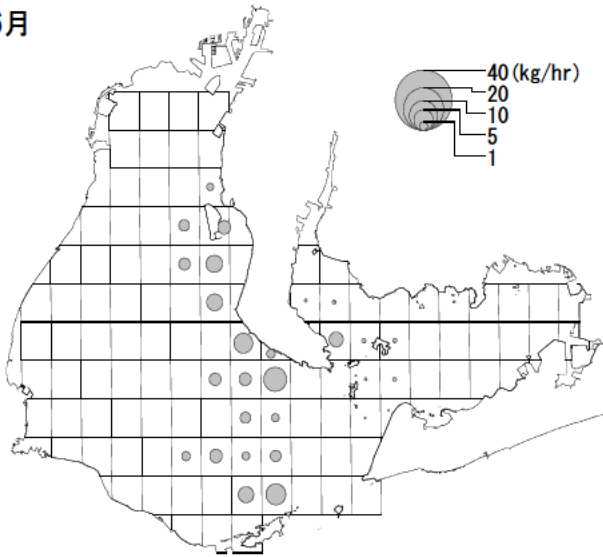
伊勢・三河湾の貧酸素水塊は6～8月の夏季に拡大し、貧酸素水塊の拡大時にはシャコの分布域が縮小する結果として水塊周辺部の比較的狭い範囲に漁場が集中形成される（図2、3）。2012年度の愛知県による漁場一斉調査でのシャコの体長組成（図6）をみると、入網するシャコの大部分は体長10 cm未満の水揚げ対象とならない小型個体であり、尾数ベースでみると75.4%（2012年5月）から97.2%（2013年2月）が再放流の対象となるサイズであった。これらの小型個体を高い生残率で再放流することができれば、成長乱獲を低減できることから、資源回復計画では、甲板上に水揚げされたシャコを高温と乾燥から守るため、シャワー設備の導入がすすめられた。しかし、7～8月の夏季には選別後の生残率は50～60%程度に低くなることが明らかになっている（平成23年度愛知県による調査結果）。

2011年の夏季（6～8月）の、小型底びき網標本船によって漁区ごとに記録された、水揚げサイズのシャコと再放流対象の小型シャコ、それぞれの単位漁獲努力量あたりの漁獲量（CPUE: kg/hr）の分布（以下、CPUEマップ）を、補足図1に示した。漁獲サイズのシャコ CPUE と比べて、再放流の対象の小型シャコの CPUE は極めて高く、漁区によっては100kg/hrを大きく超え、漁獲サイズのシャコの数10倍～100倍程度の重量に達する。したがって、今後は、再放流後の生残率向上の検討と並行して、夏季の小型シャコの混獲そのものを回避するための方策の検討が急務といえる。

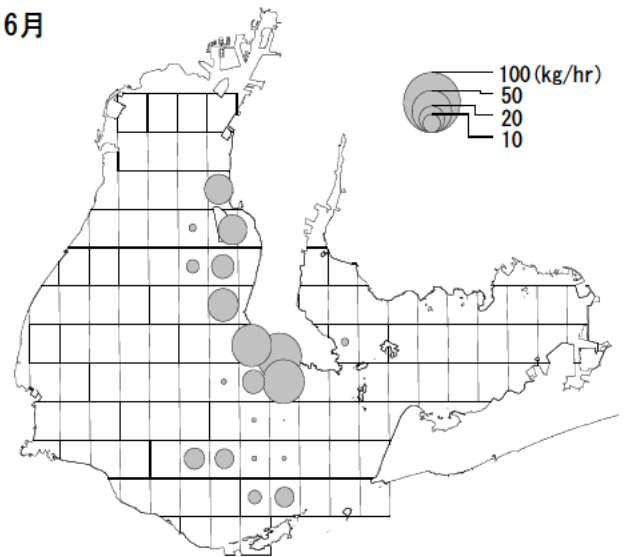
夏季の小型シャコの混獲が多い場所は、知多半島西岸から伊勢湾南部にかけての漁場全域にあるが、特に多い場所は、知多半島西岸と湾南部の漁場の縁辺部にある（補足図1）。また、詳細に CPUE マップを見ると、水揚げサイズのシャコの漁獲が多くないのに小型シャコの混獲が多い場所がある（例えば、三河湾湾口部）。このようなサイズによる分布の違いは、漁場選択によって小型シャコの混獲割合を低減できる可能性を示唆するものと考えられ、今後、小型シャコが集群しやすい場所の特徴を詳細に検討する必要がある。

また、補足図2に、2010年度及び2011年度の標本船の水揚げサイズのシャコと小型シャコそれぞれの CPUE（kg/hr）の月平均値の推移と、その CPUE に有漁漁区の面積を乗じて算出した資源量指数の推移を示した。CPUE 月平均値の変動傾向は、水揚げサイズのシャコと小型シャコとで大きく違い、水揚げサイズのシャコ CPUE が低調な夏季に小型シャコ CPUE はピークを持ち、特に8月は突出して高かった。また、資源量指数についても、小型シャコは6～8月の間の2ヶ月間は高い値をとり、9月以降は低くなった。季節的な漁獲効率の変化は考慮する必要があるが、夏季の混獲等により資源量が減少していることが考えられる。以上のことから、8月に実施する管理措置は効果的と考えられる。今後は、操業海域の場所と時期の制限等、実態をふまえた合理的な漁場利用ルールについて検討していく必要がある。

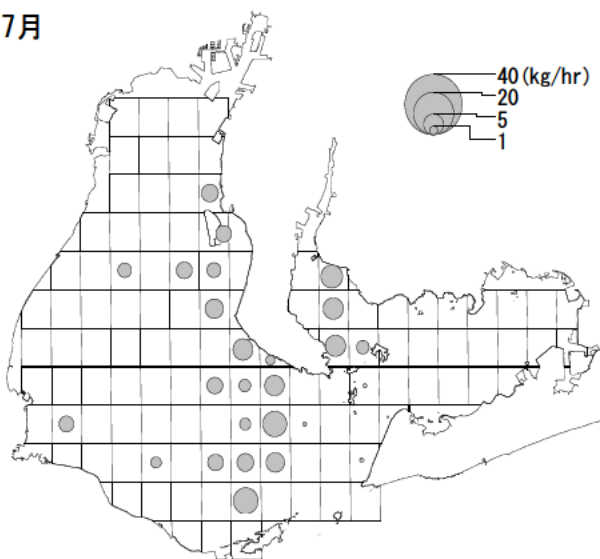
6月



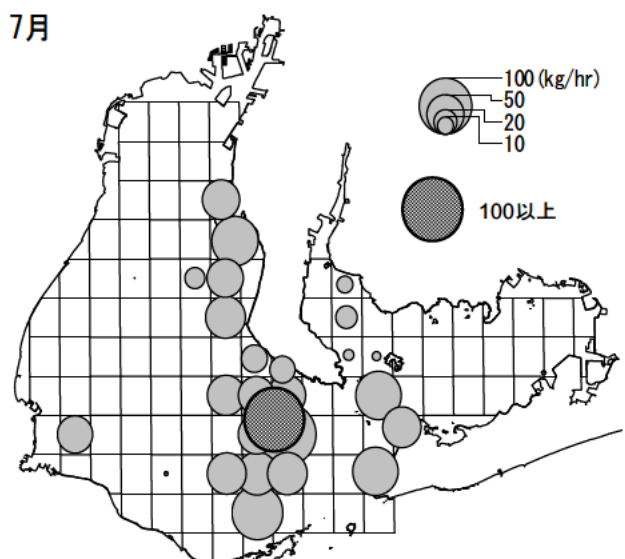
6月



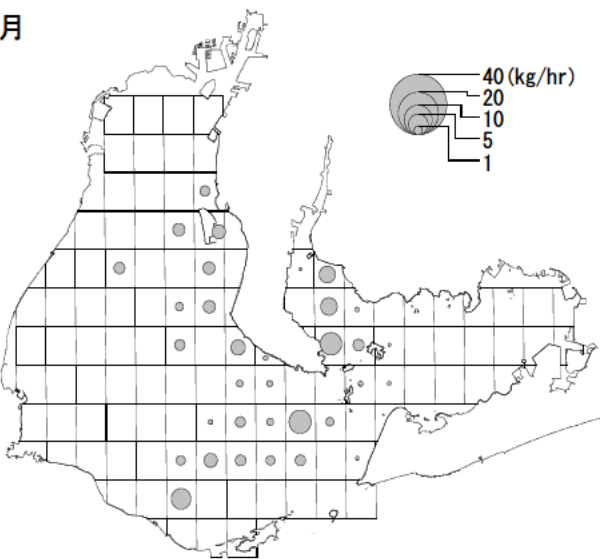
7月



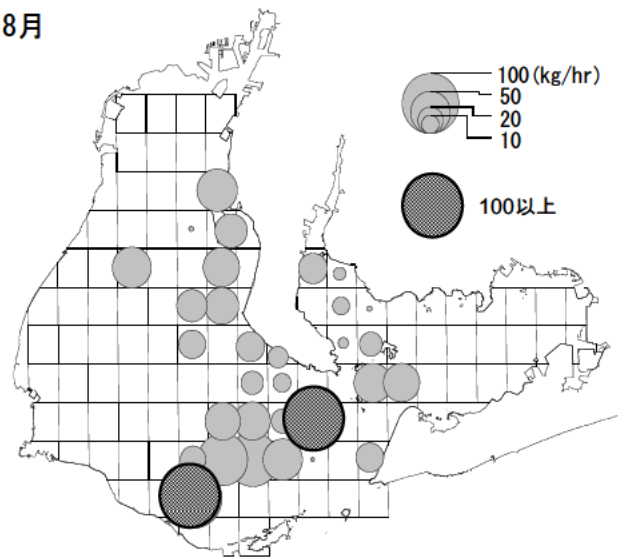
7月



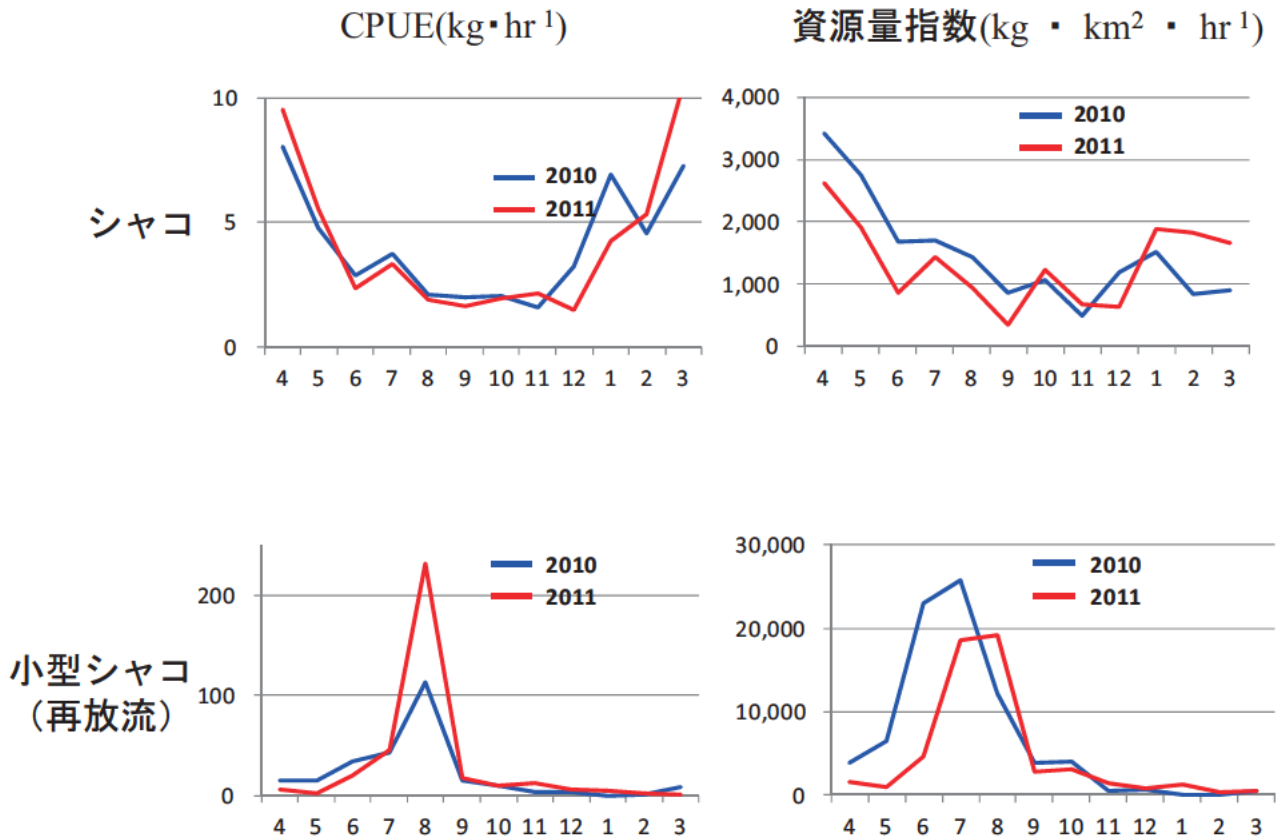
8月



8月



補足図1. 夏季の小型底びき標本船による、水揚げサイズのシャコ（左）と再放流対象の小型シャコ（右）それぞれの単位漁獲努力量あたりの漁獲量(CPUE: kg/hour) (2011年6月～2011年8月)



補足図2. 2010年度及び2011年度の標本船の水揚げサイズのシャコ（上段）と小型シャコ(下段)、それぞれのCPUE（kg/hr）の月平均値の推移（左）と、そのCPUEに有漁漁区の面積を乗じて算出した資源量指数の推移（右）